シリーズ

発達に違いのある子どもたち

子どものことばをはぐくむ環境

ある小学生の男の子が、一人で魚釣りをしていたところうまくいかず、見かねた近所のおじさんがやって来て、アドバイスをしてくれました。しかしなぜか、男の子はそのおじさんに「なんすっとかコラ!」と言ってしまい、すごくおじさんに怒られたのだとお母さんが話してくれました。

どうしてそんなことを言ったのか、本人の説明ではよくわからず、そのことばがどこから出てきたのかも見当がつきませんでした。

人の「聞く」機能

私たちの生活の中には、色々な音や声が飛び交っています。始終テレビがついていたり、音楽がかかっていたり、ゲームや動画の音がしていたり、何かの着信音が鳴っていたり、人の話し声が数人混ざっていたり、シーンと静かになることのない家庭環境、今はそれが当たり前なのかもしれません。

「聞く」機能は「聞きたくない」ことに対し、耳を塞いでもなかなか遮断することはできませんが、多くの人の脳は、騒がしい場所にいても、自分が注意を向けなければならない人の話し声に対し、神経を増強させる機能を持っているので、さまざまな音の中で会話することにそう苦労はしません。この機能を「カクテルパーティー効果」と言います。

しかし、発達に違いを持つ子どもたちの中には、この「カクテルパーティー効果」の機能が弱く、自分が注意を向けるべき人のことばを、多くの音の中から聞き分けることが困難な子どもがいます。

いくつもの音や声の中で(さらには視覚刺激も加わり)、大人が子どもに言い聞かせようと必死で話していても、子どもは他の音と聞き分けがうまくいかず、全く別の音に注意を向けていることもあるのです。そのような時、つい声が大きくなり、「聞いとっとかコラ!」と言ってしまったそのことばだけが、子どもの耳に残ってしまうかもしれません。そして似たような場面に出くわすと、ここぞと言わんばかりに使ってしまいます。

集団の中での困り感

「カクテルパーティー効果」の機能が弱い子どもは、色々な人の話し声が自分に向かっているように感じる場合もあります。自分に話しかけられていないのに、その話に入って邪魔者扱いされてしまう、誰が誰に話しているのかを読み取れず、時には無視したと思われる…、しかし本人には理由がよくわかりません。

このような場面は、騒がしくなる休み時間に起こりがちです。集団の中でのコミュニケーションがうまくいかないと、人と関わることに自信が持てなくなり、関わりを避けるようになるかもしれません。

コミュニケーションの成功体験が少ない子どもは、いざという時に周囲の状況を読み取り、適切なことばを選択することが苦手です。自分が嫌なことをされた時、それを「やめて」「しないで」と言えず、とっさに日頃聞いている周囲の大人の「口癖」を言ってしまったり、テレビやDVD、さまざまな動画に出てくる強烈なことばを言ってしまったりします。

「そんな汚いことばを言ってはダメ!」と言われても、日頃のことばのモデルがそうならば、そう表現するしかないのです。

ことばをはぐくむ環境

子どもとことばを交わす時に、聞いていないと感じる時は、その理由を一度よく観察する必要があります。大人側に立っていては気づきにくい理由もあります。場合によってはさまざまな理由で「聴こえ」が悪いかもしれません。

子どもが情報処理しやすい環境の中で、子どもの示すことに共感しながら、場面に合った適切なことばのモデルを示していく、1日に数分でもいいから、積み重ねていくことが、子どものことばの育ちにつながっていくことでしょう。

文書寄贈
NPO法人こころ・コミュニケーションの発達支援「まいすてっぷ」

参考文献
▽4歳までの「ことば」を育てる語りかけ育児
(PHP・中川信子著)
▽ことばをはぐくむ　発達に遅れのある子どもたちのために
(ぶどう社・中川信子著)